江戸名所図會

五 5

河崎六郷渡口より向ふの方にあり東海道官驛の一ツなり行程品川より二里半驛舎数百軒整々として両側に聯る

小田原北条家の所領役帳に雉田新三郎及び伊勢兵庫頭間宮豊前守等の所領の中に此河崎の地名あり又同書大珠寺分十九貫四百文の内五百文を川崎に伏すとあり

平安記行

河崎といふ海辺に宿りて使なとおとなふやうにきこえしやまとくハ長光寺日耀上人のもとの孫僧にまかせて逢ける路馬むかへと立ちのきしに此崎にかゝる岸のたゞずみしれハ

秋朝霧あらはれて河崎に浪とみまかる白雲　持資

いさこといふ所にて

かくあるいさこの里をすぎてみれハ堤に見ゆ汀の浦風　全

河崎庄司次郎高重宅地　按に長光寺保となり今志くらんと恐らくは廃寺となりしなるへし此驛中の小地名ゆしく今も久根崎町新宿砂子町小土呂町等の名あれ砂子といふを　其舊地今志らん相傳ふ高重昔談谷に住を後違綸の事ありて此地へ移り住となり又旧地堀内にあるもし山王の祠をも此河崎に迁せしといへり

河崎万年屋（かはさきまんねんや）
奈良茶飯（ならちやめし）

按に今河崎の驛舎の南に堀の内と字せる地ありて山王権現の社あれども
疑ふらくハ高重渋谷より遷されし御神ならんかされども次の山王の社地
なるよし此ハ其趣充遷へり又此辺を堀の内と称するハ高重か旧館の地なるへ
けれども上人もこれを詳にせず猶他日考ふべきのみ

堀内山王権現宮 河崎上新宿街道の中程より左へ入こと二丁許
南にあり相伝ふ欽明天皇の御宇勧請ありしと河崎の鎮守
にして神領あり 社司鈴木氏奉祀す 鈴木氏祖先を三郎高重と
いふ熊野の鈴木氏より
出たりと
いふ

本社 祭神武甕槌命 相殿 経津主命 伊弉諾尊 菊理媛 伊弉冊尊 五神合祀す

正月三日流鏑馬神事あり 六月十五日ハ大祭にして十三日より
十六日に至て大に賑へり 其間渡田邑の海濱にある所に旅
所へ神幸あり 洗足の森と号く御手洗池ありその傍に弁天の叢祠あり又同書に長八丁の馬場あり新田家より寄附ありしと云伝ふ
上人云此御手洗池に生ずる魚蛇ハすべて片眼なりとぞ
十五日 神輿渡御の時前へ神幣七柄を持
出せり相伝ふ弘安四年川畑櫻川左近取と申もの入勅を蒙り
奉幣使としてこの當社に向ひし頃の幣串なりとて當社第一の
神宝とす 奉幣使の人名尤不審なれども只伝説によりて記すものなり 又九月十九日ありて角力の伎を
興行し十一月廿三日ハ八年の市立あり
按に同所佐々木明神の社記に佐々木四郎高綱頼朝公の命を蒙り河崎山王宮の社造営奉行たりしと云ことを載たり當社のことをいへるなるへし

洲河原挑林 河崎渡口より大師河原迄の間すべて田園悉く
挑樹を栽たり故に開花の時に至れバ紅白色を交へて奇
観なり

除厄大師堂 大師河原にあり金剛山平間寺金乗密院と号す
真言宗にして醍醐三宝院に属せり 當寺に安置せし大師の霊像ハ此地より出現ありし故にその地を
大師河原と号す永禄二年小田原北条家の所領役帳に六行方与次郎といふ人此地を領せしとあり

弘法大師像 弘法大師の真作なりしが海中より出現ありし時仏體悉く貝殻相着てありしと

額 金剛山 石川丈亮頼直筆 容殿に平間寺と書せしも同人の書なり

六字名號石碑 堂前左の方にあり石面中に南無阿弥陀佛とありて
傍に寛永五年三月二十一日雪翁月盛居士と注し花押を
印せり碑陰に武州江戸京橋紀伊國屋櫻井又太夫正月二日御霊夢の所六郷
大橋にして大師の御筆を蒙り此名号法名雪翁月盛居士万人に愚筆を染て

河崎山王社

大師河原

大師堂

正五九月の廿一日参詣多し就中三月廿一日ハ御影供おほく詣人稲麻の如く往還の賑ひ尤夥し

此辺茶屋多し

供養となせし鑄付られ東海道名所記に云く寛永年中江戸京橋に紀伊國屋作内とて一文不通のものありし酒を造りて業とせ作内深く此本尊を信仰し常に歩を運びけるにある夜の夢中に大師六字の名号を書教へあるに奇異の思ひをなしある日當寺の大師へ参詣しけるに六郷の橋の上にて筆一對拾ひぬ夫より大師の教へのごとく名号を書しぬるに筆勢殊に類なかりしかれハ作内石塔に名号を書て鑄つけ大師河原に建られと外のすハ一字をも書得さりきと云ゝ

縁起曰弘法大師の靈像ハ大治年間此所の浦に住る平間氏某なる漁人常に三寶を敬ふ其家貧しく産業を弘ん方便もなく空しく年月を送り迎へ既に四十二歳の年にあたり依て災厄消除を神佛に祈りけるに或夜大師告て曰く我昔在唐の日自ら吾が肖像を彫し有縁の地に漂着すべしと誓ひ海水に投ぜ後久しく海底にありしが今幸に此浦に止る汝網を下して是を得ば永く此地に化益を布厄難を除滅し人ゝの所願圓満ならしめんと漁人夢覚て奇異のおもひとし夜のあくるを待て海上を見渡すに一條の光明赫たるゆゑ其一所に舟を寄せ網を沈降すに果して夢中に見る所の容貌に毫釐も違ハざる大師の靈像を得たり仍て一字を創立し平間寺と号（平間氏の号を採て寺号とし）爾来已降靈應著く常に詣人絶ることなし正五九月の廿一日別て三月二十一日ハ御影供修行あるが故に大に賑ハへり

蜂龍盃

大師河原村池上氏の家に蔵せり往古慶安年間此地に於て酒戦ありし時用ひられし盃なりとて酒七合餘つぎをうくると云（蜂ハさし龍ハのむ蟹ハ肴をとらむといふ意を含めりと有り）盃中蜂と龍と蟹との象を描金にせり

相傳池上氏ハ小田原の北条家に属し仕ふ小田原落城の後池上村に移り池上を氏とせ（後今の地へ遷るとなり）大蛇丸底深が末裔なり（底深通称を池上太郎右衛門といふ）此家ハ水鳥記にのせし酒客大塚の地黄坊樽次（茨木春朔と称せ春朔のことハ第四巻小石川祥雲寺の下に注せり）慶安元年八月江戸大塚の地黄坊樽次底深共に酒将となり數多の酒兵を集め敵身方と分れ

假に一の法令を立て犬居目礼古佛座等の名を設け酒量を
様さんとて大盃を執て勝劣をあらそひ戯れとせしことなり其事
水鳥記に詳なり　此書江戸と京都との二本ありて何れも刊本にて樽次
る輩の求めに應じ酒客を集めおのれも飲しことを
自ら著せし戯編なり　又此家に酒戦の時酒徒に示せる制札あり　闕損
今も其半を存せり樽次の書なりとて墨の跡うるはしく古色疑ふべくもあらねど
されど其文水鳥記に出る所と少く異なり其序に連る酒客の名左のごとし

六位大酒官地黄坊樽次　江戸大塚住
毛蔵坊鉢呑　同赤坂住
佐藤権兵衛胸赤　同小石川住
鈴木半兵衛飲勝　同船町住
名護屋半之丞盛安　同浅草住
木下杢兵衛飯嫌　同同住
三浦新之丞樽明　同冨坂住
佐々木五郎兵衛助呑　同麻布住
同弥左衛門酒丸
松井金兵衛夜久　武州八王子住
齊藤傳左衛門忠呑　同南河原住
喜太郎醒安　同大師河原住
半齊坊數呑　同蕨驛住
小倉又兵衛　同川崎住
佐保田酔久忠酔　同菅村住
求見坊樽持　相州平塚住
甚鍊坊常赤　同鎌倉住
以上十七人

大蛇丸池上太郎右衛門底深　武州大師河原住
池上長吉底成　底深長男
同百助底平　同二男
同七左衛門底安　同舎弟
同左太郎忠成
同三郎兵衛強成　底深甥
四郎兵衛底廣　底深従弟　武州稲荷新田住
山下作内請安　江戸赤坂住
藪下勘解由左衛門早呑
竹野小太郎盥呑
同弥太郎數成
米倉八左衛門吐次
田中内徳坊呑久
朝服九郎左衛門捕呑
肉とゑ九二郎常佐
以上十五人

末廣松　稲荷新田石渡氏の門辺にあり此石渡氏も水鳥記に
見えたる酒徒なる四郎兵衛底廣といへる人の末なり　昔は

庭中林泉の錯杯ありて橋の傍に下戸の葦渡あり又注せし制札を建られしとなり酒客宴飲の旧跡にて今田園となる此松も底廣の愛樹なりしを末廣と名つけられしといふ此家にも酒戦の頃用ひられしといふ大盃あり酒七合を入るゝといふ盃中金泥もて鶴の形を描金せしものあり箱の蓋に水鳥底廣盃と題し又左の如く捺発句を注せり

大坂にありけるときけて樽次といふもの孫にあたる

一ト夢や西瓜上戸孫が乃経　治圃

按に底廣を樽次と思ひ誤りしとおぼし

鹽濱

同所南の方北海濱なり寛文九年己酉叶栄雲及ひ泉市右衛門といへる者開初られしと云依て今も大師河原川中島稲荷新田等の村々塩を製するを以て産業とせるそのゆへに此地風光甚佳景なり

河崎
汐濱

石観音堂 同所平間寺より七丁斗南にあり天台宗にして慧日山明長寺と号す本尊ハ石像の如意輪観音也故に石観音の称あり 毎月十七日道俗通夜参籠す霊亀石ハ門内左の垣の傍にある所の石の手水鉢をいふ 土人が伝ふ此石ハ往し享保十八年の秋海底より出現不の霊石ゆゑしく此地の漁人引揚なとせし時二三の霊亀出て漁人と共に捧げ揚ぐ依て大悲の威神力あるを知り同七月晦日竟に堂前に居らる とそされと今ハ此石破れ損しく水をたゝへらし

新田大明神社 堀の内山王の社より耕田を隔て七丁斗南の方渡田村の道より右にあり 渡田昔ハ亘田に作る 例祭ハ七月二日なり 土俗云毎年正月元日と七月二日の暁にハ必軍馬の馳く音するとなり 本社祭神 新田左中将源義貞朝臣の霊なり 相傳ふ河北矢口村に鎮座ましし侍を霊此社に来りしとなり 義貞ハ廢子義興公の神 公延元二年丁丑閏七月二日越前國足羽の里にて戦ひ利あらずして竟に主なき矢のために亡ひ給ひしかハ骨鯁の臣亘新左衛門

河崎新田社
無動寺
亘新左衛門墓
亘新左衛門墓
無動寺
新田社

尉早勝無念の涙を拭ひ其所なる深泥の中を捜し求て
義貞公の差添の名剣と七ッ入子の明鏡及陣羽織等の
三種を得て此地に携へ帰り幽室に安し朝夕給仕せるうち
公の生前に異ならざりけり早勝終に弓馬を捨て人に面
せず一向静座して餘齢を養へり然るに里民等公の徳を
追慕し其三種を早勝に乞ひ清潔の地を求めて孤松の
本の土中に埋蔵し廟を営て新田大明神と崇まつりしが
此地の鎮守となりしより御開國の後祭田等を附らるとなり
其孤松今ハ枯てなし

太平記曰越前國足羽合戦の条下に軍散て後氏家
中務丞重國と云尾張守高経越前藤島の城に籠るの前に参て重國こそ
新田殿の御一族かと覚しき敵を討て首を取て候得ハ
進とて名乗候ハ名字をハ知候ハねども馬物具の様相
順し兵ともの尸骸を見て腹をきり討死を仕候つる躰
何様尋常の葉武者にてハあらじと覚て候是そ其死
人の膚に懸て候つる護にて候とて血をも未あらハぬ
首に土の著たる金襴の守を副てそ出しける尾張守
此首を能々見給ひてあな不思議や世に新田左中将の
顔つきに似たる所あるぞや若それならハ左の眉の上に
矢の疵有べしとて自鬢櫛を以て髪を掻あけ血付
洗き土をあらひ落して是を見給ふに果して左の眉の
上に疵の跡あり是に弥心付て帯たる二振の太刀をハ取
寄て見給ふに金銀を延て作りたるに一振にハ銀を以
金藤纏の上に鬼切と云文字を沈めたり一振にハ金をもて
銀脛巾の上に鬼丸と云文字を入らる是ハ共に源氏重
代の重宝にて義貞の方に傳りと聞ゆれハ末々の一族

共の帯へさし太刀なりと非をとかむるに弥怪されハ膚の守を
開きて見れバ給ふに吉野の帝の御宸筆にて朝敵征伐之
事叡慮所向偏在義貞武功選未求他可運早速之計
略者也と遊バされしは扨ハ義貞の首に相違なかりけり
とて尸骸を輿に乗せ時衆八人に舁せて葬礼のため
往生院へ送られ首をハ朱の唐櫃に入氏家中務を副て
潜に京都へ上せられたり云云

新田山成就院　聖無動寺と号ス同所一丁斗南の方同し
側にあり新田大明神の別当寺にして新義の真言宗
六郷の宝幢院に属せり本尊不動明王ハ弘法大師の作
にして義貞公護持の霊像なりとぞ　今別堂を建て威怒堂と號しかしこに安置す
左の方相傳義貞公入間川に陣を布たまふ頃二童子の枕上に
立たまひ鎌倉退治の心願あらハ目田の里に安置しまゐらする所の

御霊権現社
亘新左衛門塚

不動尊を崇信せしとなり依て義貞公此霊像に誓願をこめられて竟に高時を討亡しけるとかや

亘新左衛門尉早勝居住旧址 同所門前半町あまり西の方道より左にあり此地ハ元弘の頃亘新左衛門か采邑にして則此地に住しけるとかや早勝没せるの後も里民其旧恩を忘れずして一祠を営建し早勝の霊を鎮て御霊権現と崇敬す傍に早勝の墳墓あり高さ三尺計の石の層塔なり

姥が森 成就院よりも七八町計南の方海濱にあり堀の内山王の旅所にして西の方へ續き馬場の形を存す 土人義貞寄附の馬場なりと云傳ふ洗池ハ森の中に有て鐙の形を存せるの

栗生左衛門尉忠良塚 同姥が森より八五丁計西の方海濱に臨て方八間斗竹藪の中に有り 五輪の石塔にして文字剥落せり 相傳ふ

忠良卒せるの後早勝朋友の信をもつて其霊骨を此地に埋蔵し塚を築きけりとそ

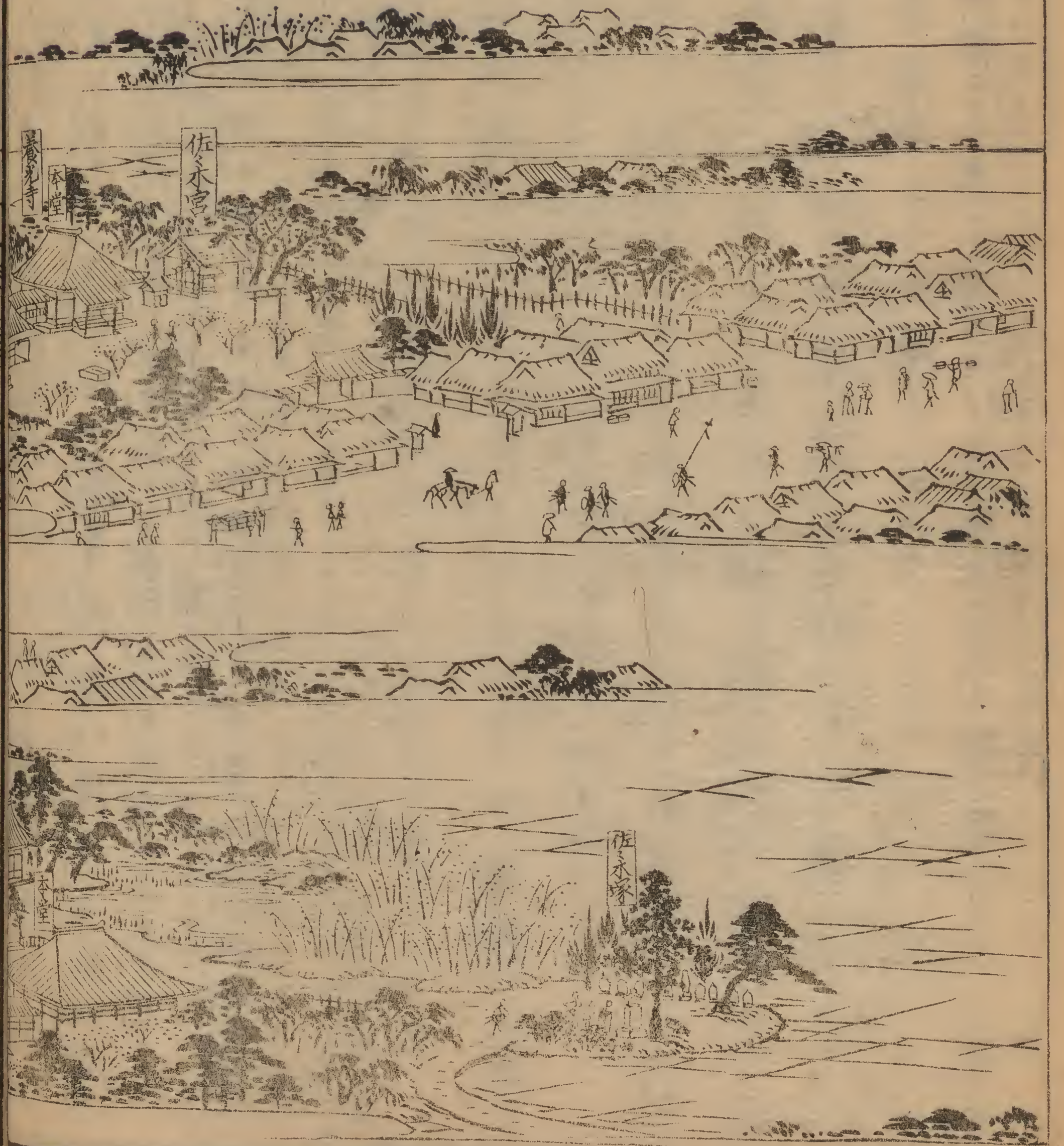
瑞龍山宗参寺　河崎駅砂子町の右側の向にあり洞家の禅刹にして末吉の宝泉寺に属せり本尊釈迦如来ハ座像にして一尺五寸計の唐仏なり脇士ハ文殊普賢の木像にして作者詳ならず　当寺古ハ薬師の別当寺にして相伝ふ当寺より養光寺の薬師此寺にありしと云

佐々木四郎高綱の香花院にして其頃ハ砂子一邑悉く当寺の食地なりしとなり開山ハ臨室玄統和尚と号す昔ハ済家の禅林にして鎌倉の建長寺に属せしを中ごろ遠の後天正に至りて小田原北条家の功臣間宮豊前守信盛といへるハ　永禄二年小田原北条家分限帳に間宮豊前守所領武蔵久良岐郡杉田江戸川崎小机末吉東郡小雀入西郡冨屋三浦元文珠坊知行の地都合六百九十八貫百廿二文の地を領せる　佐々木四郎高綱が遠裔なりしかハ寺境方八丁を寄附し末吉邑宝泉寺四代の住持自山長老を請して当寺の中興開山とし曹洞宗に改む信盛法名を瑞栄院殿雲谷宗三大居士と号す其石塔ハ当寺仏殿の後の方銀杏樹の下に存せり　元禄年間御幕下間宮家より宗参大居士供養の為其釆邑川崎小田村にて寺領の地を寄附せらるとなり

按に当寺什物元禄四年辛未正月間宮家寺領寄附状に間宮豊前守信盛法名宗三とあり又当寺開基の墓碑中に雲谷宗参居士佐々木前豊前守入道源康信と鐫りむおもふして信盛の法名を宗三に作り康信の法名を宗参に作る猶疑ハし然れとも寺号を宗参寺と称し又康信ハ当寺の開基といふ時ハ康信の法名ハ宗参なるへし疑無きに似たり

高綱護持の本尊ハ如意輪観音の木仏にして座像一尺五寸あれと作者詳ならず別堂に安しく本堂の左にあり

海栄山養光寺　宗参寺より四丁斗先の方砂子町の道より左側にあり洞家の禅宗にして宗参寺に属せり指月和尚開創の寺院なり本尊薬師如来の座像二尺五寸計あり延暦六年丁卯の年此地の海中より出現しまへりといふ　土人伝へ云此本尊ハ海中より出現の時[illegible]此霊像　浜の砂子を集めて其上に安置せしより砂子といへる地名発りと　昔ハ宗参寺の本尊なりしを後当寺に遷せしとそ

河崎
宗三寺
養光寺
佐々木宮

佐々木明神社 養光寺の境内本堂の右に並へて此地の鎮守ゆゑ宗参寺より奉祀を祭神は近江の佐々木明神は相同しきといゑ相殿に高綱の霊を崇むるとぞ古傳に高綱鎌倉右大将家の命を蒙て此河崎の地に山王宮（堀の内山王是也）建立の事ゆゑありしかハ其縁を採て間宮信盛先霊の神徳を追慕し江州の本祠を摸して此地に當社を創立すと云 九月十九日をもて祭日とす

勝福寺舊址 其廃跡今知るへからす然に南總望陀郡奈良輪邑の東坂戸市場と号する地に坂戸明神と称する社あり其社前に一口の梵鐘を懸る銘に武州河崎庄内勝福寺とありて弘長三年癸亥二月八日大檀那禅定比丘十阿及ひ壹岐守泰綱等の名を注せり按に乱世の頃陣鐘に採て彼へ遷されしより其地にあるならん歟

按に東鑑に文應二年辛酉此年二月改元ありて弘長と号す五月十三日甲戌今日晝番の衆御所におゐて佐々木壹岐前司泰綱と渋谷太郎左衛門尉武重と口論に及ふと云々然る時は鐘の銘に泰綱とあるハ東鑑に記せる所の壹岐前司のことなるへし此泰綱ハ四郎高綱の甥にて信綱か二男なり

観音堂 市場村街道より左の方一心山専念寺といへる浄刹に安置せり本尊千手大悲の像にて寛朝の作御丈四寸ありて紫式部の念持佛なりと云傳ふ 兼應年間近江國石山観音の辺に老嫗一人住り或時西國行脚の僧愚蔵坊照西といふ沙門此老嫗かもとに宿せし夜老嫗の病悩を救ふ其報として此霊像を授く後故ありて當寺に安置なしまつるといへり毎月十七日ゆゑ参詣の人多し本堂に掲る所の額に一心山と書せしは縁山前大僧正雲外の筆なり

鶴見川 海道に架する所の橋の号も又鶴見橋と唱へてし

市場観音

薬師
観音
地蔵
市場村

長二十七間　水源ハ多磨郡小野路都筑郡長津田及ひ橋樹郡馬絹の辺より發して恩田川早瀬川矢上川鳥山川佐江戸川等の川々落合ひ鶴見村に至る故に鶴見川の号あり梅松論に元弘三年五月十四日鎌倉方討手として武蔵守貞将大将にて向ふ下総よりハ千葉介貞胤義貞と同心の義有りて攻上る間武蔵の鶴見の辺に於て戦ひ打負て引退くとあり

末吉不動堂　末吉村にあり鶴見邑海道より廿七町斗西にあり明王山不動院真福寺と号す天台宗にして品川常行寺に属す本尊不動明王を安置すその像ハ坐像にして六尺余あり慈覚大師の作といふ本堂にハ十一面観音を安す坐像二尺斗り行基菩薩の作なり仁王門の額真福寺と書せしハ増上寺大僧正智堂和尚の書なり

秋田城介義景旧館地　其地今ある歟にや東鑑に仁治二年十一月四日　将軍家武蔵野開發の沙汰として義景か武藏國の鶴見の別荘に渡御頗以て壮観なりとあり

醫王山成願寺　鶴見村の内にして街道より山手へ入る事三丁斗にあり曹洞の禅刹にして寺尾天光寺に属す本尊釋迦如来にして作者詳ならす開山を聲菴聞大和尚と号せり藥師堂に安する所の藥師座像にして七尺斗り古佛にしてともに作者知れすといふ

白籏八幡宮　白籏村にあり義經の靈を鎮る所と云傳ふ別當は神奈川能満院兼帯す来由は拾遺江戸名所圖會に詳なり

子安觀世音　子安村海道より右の方北岳にあり子生山東福寺と号す新義の真言宗にして神奈川の金蔵

鶴見橋

橋より此方に米饅頭を賣家多く此地の名産とす鶴屋なにかしといふもの旧く慶長の頃より相續すると云

生麦村
志がらき茶店
生麦ハ河崎と神奈川の間宿にて立場なり此地にしがらきといへる水茶屋ハ享保年間鄽を開きしより梅干を鬻き梅漬の生姜を商ふ往来の人いこふ休ハさるものなくえんしやう今時の繁昌あめなるを
志がらき
志がらき

成願寺
竜燈松
本堂
庫裡
白山松
地蔵

白旗八幡宮
しらはたはちまんぐう
本社
白旗村

子生山
観音堂
光明杉
護摩堂
東福寺

院に属せ開基の大祖ハ勝覚僧正（理源大師の法孫）本尊ハ如意輪
観音にして佛工春日の作一寸八分の座像なり
縁起曰往古勝覚僧正一夜異僧を夢みる事あり然に
件の異僧告て曰く我ハ如意輪観音なり昔佛工春日
和州泊瀬の観音を彫刻せし序我形像をも刻して末
世の衆生を利益せよとなりしも然に我海中にある事久し
今武州鶴見川の末生麦の浦に漂泊せり是我有縁の地
なり汝関東に至り一宇を創立して安置せよと告るとみて
夢さむ僧正ハ奇異の思ひをなし直に旅装して
此生麦の浦に至られしに光明赫爍として本尊海中より
浪に随つて勝覚僧正の掌上に出現しける時に又薩埵告
て曰く此地乾隅の山に安すべしと即勝覚僧正当山に登り
佛意に任せ地をトして草創を経営し今の本尊を安置

せらる時に寛治元年三月十八日なりとも（今の御堂の地ハ昔より本尊安置の旧跡なく更に地を我改るなりしと云）其後稲毛の領主稲毛三郎平重成（中稲毛の地其嗣所領なりしとぞ）
なきを愁とし堂宇を修営し諸人供する所の米銭を
定て一年の俸に比し晨昏大士へ礼拝し事まつりけるに
恰も君に給仕するがごとし三年の後其妻懐妊し明年十一月
一男子を生せり（左衛門平動蜻蛉頭なり）重成歓喜に堪ず美田三千畝
山林方一里有半の地を寄附し山を子安と号し院宇を
植本と称を爾来薩埵の威力益新にして祷賽する者
絡繹として絶ず又堀川帝皇子ましまさゞるを愁へ
給ひしが勝栄僧正（勝覚の法嗣）此本尊の威霊を奏聞し
依て前大納言藤原道房卿をして其御祈願のために
当山に詣てしむ三年の後皇妃正子妊娠し給ひ明年五月
太子降誕なしたまへり則鳥羽院と申奉るハ此皇子なり

義高入道墓

按るに鳥羽院ハ康和五年正月十六日に降誕なしまします五月ハ誤なるへし

帝叡感斜ならす勅して子生山東福寺の号を賜ふ遙の後文亀永正の間東國擾乱兵戦起てし頃大に衰廃せしかとも大悲閣のミを巌然として残れり

寺僧云今ま至て寄願ある者當寺本尊に宿し諸人供する所の賽銭を乞年限を定め本尊に給仕と称して誠信に祈念し奉る時ハ給仕の年限満るをまつて求る所の諸願円満なしといふ事なしと称り

仙鶴山松隠寺　東寺尾村にあり　享保の頃迄ハ松音寺と称す　済家の禅林にして鎌倉建長寺雲外庵の仏寿禅師開創の古刹なり

禅師ハ建武二年二月十八日化寂すとのふ鎌倉志に文和三年二月十八日示寂とあり此地ハ雲外庵の采地なり

本尊釈迦如来ハ座像にして二尺計あり

慈眼堂　松隠寺よりさし渡し壱丁計　門を出て小さき坂を下り廻りて二丁半計　岡の上にあり　本尊十一面観音仏工春日の作なり　小机札所の一にして　松隠寺より兼帯せり

義高入道墓 仁王門の傍古墳の前に石の地藏尊を安せし小堂あり軒に義高入道と記せし額を掲けり按に義高入道ハ小笠原内藏人と称を後里見と号小田原の合戰に討死せし人なりといへと未考此地の農家に平田氏某なるあり其始祖ハ義高入道の家臣なりしとなり附て云當寺什物の中に建武元年に記せし圖あり人名を注せし中に地頭阿波國守護小笠原内藏人太郎入道といへる名ありこゝに阿波の國とあるハ安房國の誤なるへし小笠原内藏人ハ先の義高入道の祖先なるへきか或ハ又義高の名に附會して里見を混し交へしものか猶可考

護國山觀福壽寺 東子安村新宿海道より右の方山際にあり世俗浦島寺と称す昔ハ歸國山浦島院といひたる由縁起にみえたり當寺ハ淳和帝の勅願にして檜尾僧都開基なり

本堂 本尊聖觀世音菩薩 立像にして御長一尺三寸あり世に浦島の觀世音とのみ称せり寺傳に云く當時浦島子蓬壷の蘭臺にあそひ旧里に走んとするの日神女一箇の玉匣と共に大悲の尊像をあたへて曰く子今本土にかへり去らんとす仍て渡海風波の難を凌き又長生をうしなはん事を祕き給ふと覚に嶋子なれハ帰り去るの後むさしの國霞か浦につくり今の神奈川の地に靈像の告により父のつかの地をもとめ傍に草堂を結んで彼大悲の靈像をうつしまつりしとなり

浦島明神 本堂に並ひ八千歳の神社とも称する由縁起にみえたり此神ハ浦島太郎の靈をまつる縁起に檜尾僧都より五世の孫勝海上人の時に至て寛平七年七月七日靈告ありしより毎歳七月七日を祭日と定むるといへり今按に後の國竹野郡阿佐茂川の東網野村といふ所に浦島子の靈社あり浅毛河明神と称せり又網野明神とも号るよし詞林采葉あるひハ神社啓蒙等の書にみえたるも和漢三才圖會に浦島子ハ根見命の後胤なりとあり可考

龜化大龍女 同本堂にあり浦島子海上に釣を垂くぬる靈龜を祀ひまつるといへり渡海安穩守護の神なりとて船人多く是を崇敬す

龍燈松 詩の後の方山の頂にあり傳いふ此樹上今も時として龍燈の懸ることありと當寺の守なる八龍宮拝殿の靈像なる故に八重燈としてかくのごとしとならむ

目當燈籠 龍燈松の下にあり夜中入津の船の便とす享保の頃此地の農民松井某建立せしとぞ今に連綿せり

菩提樹 當寺山林に數株あり年々に實生を結ぶ浦島子龍の都より齎らし來るなりと

浦島太郎墓 堂前にあり島子自建置しといへり故に龜墓ともいふありといへり

同足洗井 道の傍にあり今も里民の用水とせり又布袋丸の井ともいふとそ

同腰掛石 其田跡今もさるあり

日本紀雄略記曰
雄略天皇二十二年戊午秋七
月丹波國餘社郡管川人水江浦島子乘舟而釣
遂得大龜便化爲女於是浦島子感以爲婦相逐
入海到蓬萊山歷覩仙衆語在別巻

日本後紀淳和記曰
淳和天皇天長二年歸鄕至
今三百四十七年也浦島子到蓬萊居之三年春
日初暖群鳥和鳴煙霞濱靄花樹競閑閑歸歟之
計婦曰列仙之販一去難再來縱歸故鄕忘非住
日浦島子爲訪親舊強催歸駕婦與一筥曰愼莫

觀福壽寺
浦島寺といふ
竜燈松
觀音堂
浦島塚

開此筥若不開者自再相逢浦島子到本郷林園零落親舊悉亡逢人問之曰昔聞浦島子仙化而去漸過百年爰悵然如失歩於耶鄲心中大帷閉匣見之於是浦島子忽變衰老皓白之人不去而死

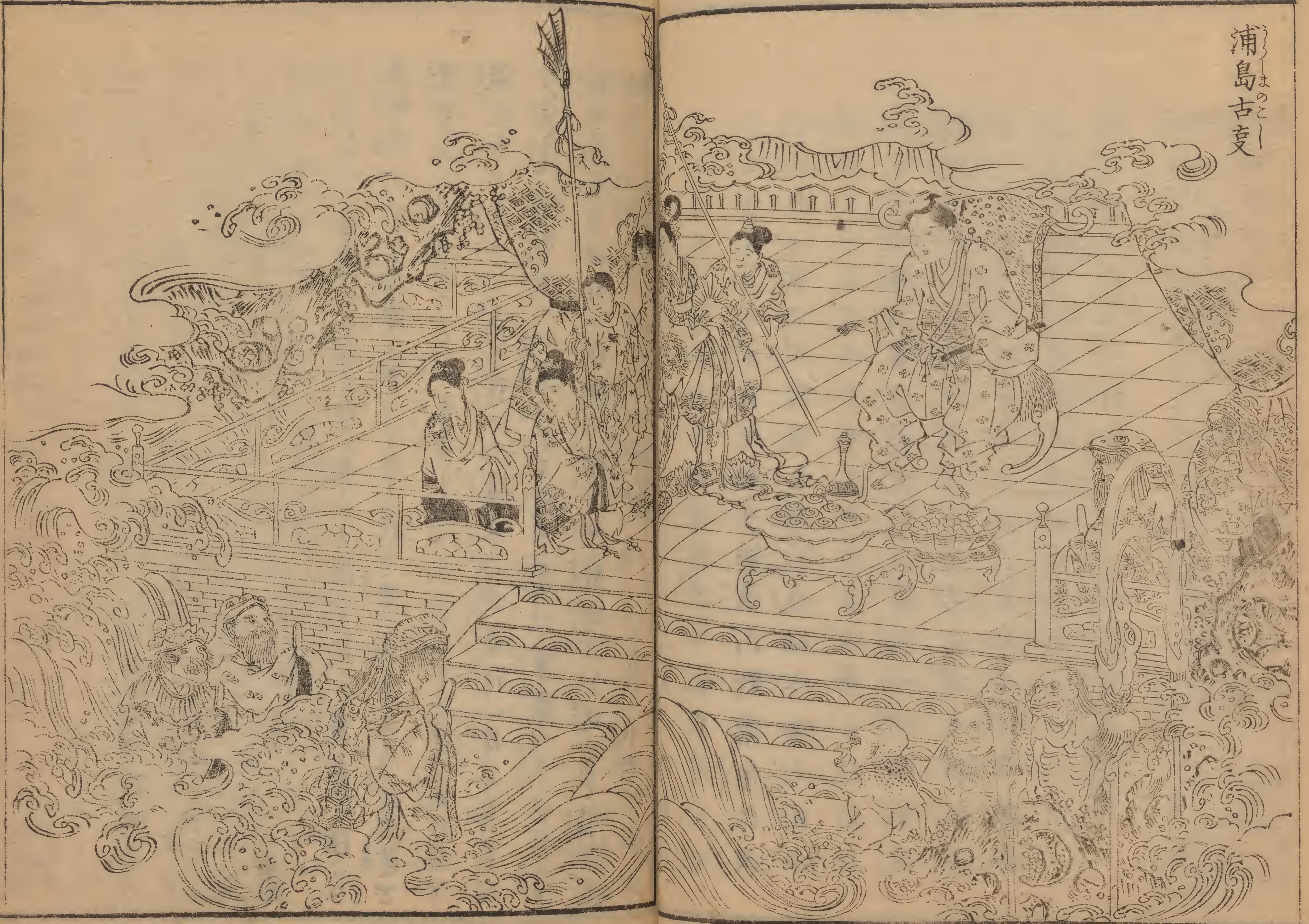
万葉集

春日之霞時爾墨吉之岸爾出居而釣船之得手乎良布見者古之事曾所念水江之浦島兒之堅魚釣鯛釣矜及七日家爾毛不来而海界乎過而榜行爾海若神之女爾邂爾伊許藝趍相誂良比言成之賀婆加吉結常代爾至海若神之宮乃内隔之細有殿爾携二人入居而老目不為死不為而永世爾有家留物乎世間之愚人之吾妹兒爾告而語久須臾者家歸而父母爾事毛告良比如明日吾者来南登言家禮婆妹之答久常世邊爾復變來而如今將相跡奈良婆此篋開勿勤常曾已良久爾堅目師事乎墨吉爾還來而家見跡家毛見金手里見跡里毛見金手恠常所許爾念久從家出而三歳之間爾墻毛無家滅目八跡此筥乎開而見手齒如來本家者將有登玉篋小披爾白雲之自箱出而常世邊棚引去者立走叫袖振反側足受利四管頓情潰失奴若有之皮毛皺奴黒有之髪毛白班奴由奈由奈波氣左倍絶而後遂壽死祁流水江之浦島子之家地見

常世邊可住物乎劔刀己之心柄於曾也是君

按るに日本紀丹波國とあるをいまく丹後國とされたる前なれハなり續日本紀に元明天皇の和銅六年夏四月乙未に丹波國五郡を割てはじめて丹後國を置とあり夫より後与社郡ハ丹後に屬せしなり其比の書皆ことごとく丹後國とを丹後風土記和名抄扶桑略記の類ひ與謝に作る又管川ハ丹後風土記に筒川に作る水江ハ日本紀に水江とも萬葉集中にも或ハ墨吉とも書り浦島子た

浦島古叓（うらしまのこし）

傳〻浦島子傳ともに澄江とも揔ふ仙覺律師の萬葉集抄ふ引所の丹後風土記ふ美頭乃睿能宇良志麻之子とありてもそふ江のえとも水を澄江義あらん通して云なるへし

相傳往古　雄略天皇の御宇 日本紀雄略記二十二年戊午七月とあり 丹後國與謝郡管川の人ふ水江浦島子といふあるも 寺記云相州三浦住人水江浦島太夫と云ものの大裡の役よ勤てありし丹後國餘佐郡管川と云所よくらり後も其子ふ浦島太郎といふありと云〻古書浦島子よ作る寺記ふの子太夫或ハ太郎なとかせり續浦島子傳よ浦島子何をの人なるをすして蓋上古の仙人なり齢三百歳を過く形容童子の如し人となり仙を好之秘術を学ぶとありて又丹後風土記ふハ日下部首等か祖ふして筒川の島子と云是水江浦島子と云云 一時七月の事なるふ獨小舟よ乘して海上ふ釣し靈亀を得たり其形勢を見ふ尋常よあらさりけれハ怪しとおもひ且何舊て是を放ちけり浹辰ありて彼亀化して一人の美女となり前の恩を報んとて島子か手を携へて蓬萊山海若神の都よ至りぬかくて後浦島子ハ仙室の筵よ侍し常に靈藥の味ひを嘗目ふ花麗を視耳ふ雅樂の樂を聞觀宴日を送りしか 日本後記ふ浦島子遂ふ居澤三年とあり又丹後風土記上ふ同し されと本土を懐しみ心起り獨二親を慕ふ神女ふ此よしを告けれハ神女ハ島子か別を戀慕ふといへとも竟ふ止るへき色も見えされハかひなく一箇の玉匣を與へて云く子遂ふ賤妾を遺れすして再ひ此神仙境へ来らんとおもはハ必此匣の裏を開きたまふなかれと島子そのよしを約しけり事外喜ひ彼匣を受侍へて手をわかち辭し去る頃蓬嶺の仙都をはなるゝとおもへハはや與謝の舊里ふ皈り着ぬ 日本後記云浦島子天長二年郷ふ帰る今ふ至て三百四十七年ありと云云 詞林采葉抄云島子蓬萊よ入の後帝王三十二代を送るとあるも水鏡よ雄略天皇廿三年と七月よ浦島子蓬萊へ行らせになりと云〻同書淳和天皇天長二年ことし浦島子ハかへりきたる中略雄略天皇の御世ふうせてことし三百四十七年といひしふかへりくたりしありと云云 案ふ考るふ天長二年ハ支干乙巳よあたれり又雄略天皇廿三年己未よあたれり日本紀二十二年とし戊午とも然るときハ三百四十八年なりとも されと物換り星移り家園ハ變して河濱となり山岳ハ改りて江海となる荒蕪の閭邑煙を絶え舊塘寂寞として道路跡なくしてゆかしくあるもふ知人さへなかりけれハかの怪しみかつ驚き郷人ふ旧俗の行方を問ふ一人の翁答へて云く昔聞

水江の浦島子といへるもの釣を好ミ舟に乗じて海に遊ひ永く
家に帰らすといへりもちまとを幾数百歳を経るを忘るゝをも

續浦島子傳に云ふ浦に衣を洗ふの老嫗にあふて旧里の古人を問姫答へて
いはく我年百有七歳のむかし島子の名をきく只唯我祖父の世古老口傳して数百
歳を経るのミ傳来語に云く昔水江浦島子といふ者あり釣を好み舟に乗じ久江
浦に遊ひ遂に海中に入てより幾数百歳を経るを知らすと日本
後記に云ふ乃ち一郎浦島子仙化あふに於て蓬嶺の仙宮に遊ふの間時世
して去り漸く百年をすぐると云々

遥に隔って舊里の遷変せしことを悲歎し又仙遊の未央を想
像して悲慮に堪も前の誓ひを忘れて忽に玉匣を開きしかハ
裡より紫雲出て蓬城をさして靉靆としてさるのこ時に
其形容忽然として衰老皓白の人と変を云云

万葉集氣佐倍絶而後遂壽死

祁り流水江之浦島子家地見云云丹後風土記にも島子俄に老翁となり遂に死を
時は天長二年なりとあり扶桑略記日本後記上に同し續浦島子傳に島子神
女一諾の約を違へ仙遊再會の期を失ひ紅顔眸行白髪を混し丹誠萬緒奔
宮を乱其後金梁に鳴て玉液を飲紫霞を喰青彩を服頸鶴を延立て遥に
瀛海の蓬嶺神鳳の駟を望み時々遠く仙洞の芳瀲を顧み嶺河に翔遊して
滄浦に隠淪し遂に後ちまとを忘し只後代地仙と號し所謂浦島子傳古賢撰
…千古に傳へしと云々此傳ハ延喜二十二年庚辰八月朔日に…

逕之とあり永仁二年甲午八月廿四日丹州阿川庄福田村宝蓮寺如法道場に於て
若命背き難きに依て筆跡を顧も狼藉に紫毫を馳きぬと

寺記云後又八千歳の齢を持ちて再ひ海神の都に入も

いつも諸書の要とつむ　抑當寺ハ淳和天皇の勅願にして凡九百七十有

餘年を歴たる古藍なり　同帝弟四の妃ハ浦島子か九世の

孫なり妃深く佛乗に帰しあひ帝に告まうして空海阿闍

梨に計りて檜尾僧都實慧をして是を司らし給ひ梵字營構

ありて真言の密場となしあふ

元亨釋書云如意法尼ハ丹後國余佐郡の人十歳にして王都に入弘仁十三年帝に常に如

年帝霊夢を感しあふの後花使をつかはし妃を招まふ妃深く佛道に志ありて天長元年天下

意輪を一丈の重をもつて一篋を蓄ふ人其の裏を知るものなし空海妃の篋を捧て秘奥を修む数百歳久しく

大ふ畢を守敏空海後光拵競て法雪を祈る空海妃の篋を捧く紫雲をふ空海

雨澤天下に給ひぬ妃の同國水江の浦島子と云ものあり妃に先りて

仙郷に棲む天長二年故郷に還る浦島子のもつ妃の持ふの篋を紫雲

師佛像を刻む時に妃像を篋中におさむと云く同書の論にいはく妃の篋怒らくハ

神仙の器なるらしそれハ是密乗の秘蹟なり

浦島子ハたゝ蓬瀛の一賓のミ何そ悲をおこらんやと書せと

破もく悲しむ雨にそゝき朝の霧夕の月ハ香の煙と燈の光つとま

かりそめの仍く唯機縁感應の時を契るのみ然るに應長正和の

項鎌倉光明寺第二世寂慧上人（記主の家嫡にして白旗流の大祖と傳ハらふに略す）故郷白

旗へ往来まる毎に當寺観音へ詣し守者もなきを歎き法弟

慧光上人（姓大森氏相州人）をして住持としめ二度寺院を營建しあり

そめく浄世の精舎とせしなりなり

神奈川驛　東海道五十三驛の一なりて行程河崎より二里半なり

此地の名義ハ太平記梅花無尽蔵鎌倉大草紙等の書皆神奈川に作る國大曆ゆへ狩野川に作る　次の上無川の条下に詳なり

本宿　新町より西の町迄四町の間の惣名之　青木町等の名あり　瀧の町より下臺迄の間六町の惣名なり　又臺より

向輕井澤と云地迄をつゝく神奈川驛と云へり

平安紀行

海人ゆふ柱むすふかとそるなりしてあまえなとぬかの川の里　持資

梅花無盡蔵　文明十七年乙巳

神奈河（小春二日）出世戸井赴江戸途中有老松蟠屈其

形如竜其処号鶉森

神奈民鄽极屋連　深泥没馬打難前

鶉森春動臥松老　木入飛竜九五乾

神奈川總圖
平尾覺の松
本覺寺
本堂
方丈
中門
三宝寺

其二

其三
金川駅送別
出餞西看山上山銜杯
為問太刀鐶蒼波欲通
金川海紫氣遥懸玉笥
関遊子浮雲催暮涙故
人衣鬢別離顔驛亭不
解銷魂色征馬翩々送
往還
南郭

神奈川臺
此地ハいづくも海岸に臨みて海亭あり往来の人の足を止む此海辺を袖の浦と名づく
平安記行
川の里
持資

京都紀行　　澤庵

浮世をなかるゝ淵瀬に人をしらぬみなかにうもれはてぬる

此地ハ太平記にも正平七年の閏二月廿日の武蔵野合戦に新田義興脇屋義治兄弟終に二百餘騎に打なされ落行たき方をなし討死をつき命なれハ鎌倉へ打入て足利左馬頭に逢て命を失ハんやと夜半過る程に関戸を過ぬるに途中にして石堂入道三浦助等の勢に行逢ひなひ躰にて此勢と打連て神奈河に着て鎌倉の様を問ふに由こそあれ

又鎌倉大草紙にも永享十二年四月六日上杉修理大夫持朝伊豆國を立て山の内北庄に帰参し長尾郷に滞留せしめ同五月十一日神奈川へ出勢ありしとなん

上無川　本宿中の町と西の町との間の道を横ぎりて流るゝ小溝を号く此所に架せる橋を上無橋と称す　橋の長さ二間ばかり

常ハ水涸て僅の小流なれども水源定かならざる故に上無川と云則神奈川の地名の興る所以にして後世其志の二字を略して神奈川と云るなり品川も亦下無川なりしを是も毛志の二字を省きてかく呼る由寛永五年齊藤徳元の紀行にみえたり　小田原北条家の分限帳に矢野彦六といふ人武州神奈川ハ南奈髙崎の地を領せしとあり

海運山能満院満願寺と号す本宿荒井町道より右側にあり古義の真言宗にして鳥山三會寺に属せり開基ハ内海光善といへる人なれど開山ハ重運と号す本尊虚空蔵菩薩ハ海中より出現ありし三寸九分の霊像なり相傳ふ正安元年己亥八月十三日此地の漁者に内海新四郎光善といへるあり此日海中に網を沈しけるに此霊像を得たり然るに光善の一女子に託して曰く我ハ是房州

北條上杉
神奈川闘戰

清澄寺の閼伽井にありて七百有餘歳を歴たり今此
地の有縁によりて彼所より移しまゐらせ汝堂宇を営みて我
像を安置せよ必子孫をして幸福あらしめんとなり
依て直に當寺を開創して此靈像を安して奉るといふ
光善の遠孫此地に
ありて今も猶連綿たり

洲崎明神祠 海道の右側にあり普門寺別當たり安房
國洲崎明神に同じきなり房総志料に天比理乃咩
命を祭ると源平盛衰記に洲崎明神ハ八幡大菩薩
を祝ひまつるとあり此二説を挙て疑を存す

熊野権現社 神奈川本宿町海道より右にあり別當ハ
金蔵院東曼陀羅寺と号す新義真言宗之 當社權現山の
頂に勧請ありしをこの地へ移しまゐらせりといふされど
此地權現山の頂きにも熊野權現の草祠を安置せり

瀧の橋 本宿町の町と瀧の町との間海道を横ぎり流るゝ
川に架せる此橋下の流れを瀧の川と号く故に志かり水源ハ
七八町西の方堰村と云より発まる所の流なりと

橋本宗興寺 橋より向ふの川添洲崎町なる西の方道より
左にあり曹洞の禅宗にして同所本覚寺に屬せり
本尊釋迦如来ハ宮朝の作にして一尺あまりの座像なり
此寺ハ古ハ山上観音堂五層
塔の本尊なりしとかや 堂前の清泉ハ寛永年間
大将軍家御上洛の時此地本宿に御旅館を構させられ
し頃御茶の水に掬せられしと云

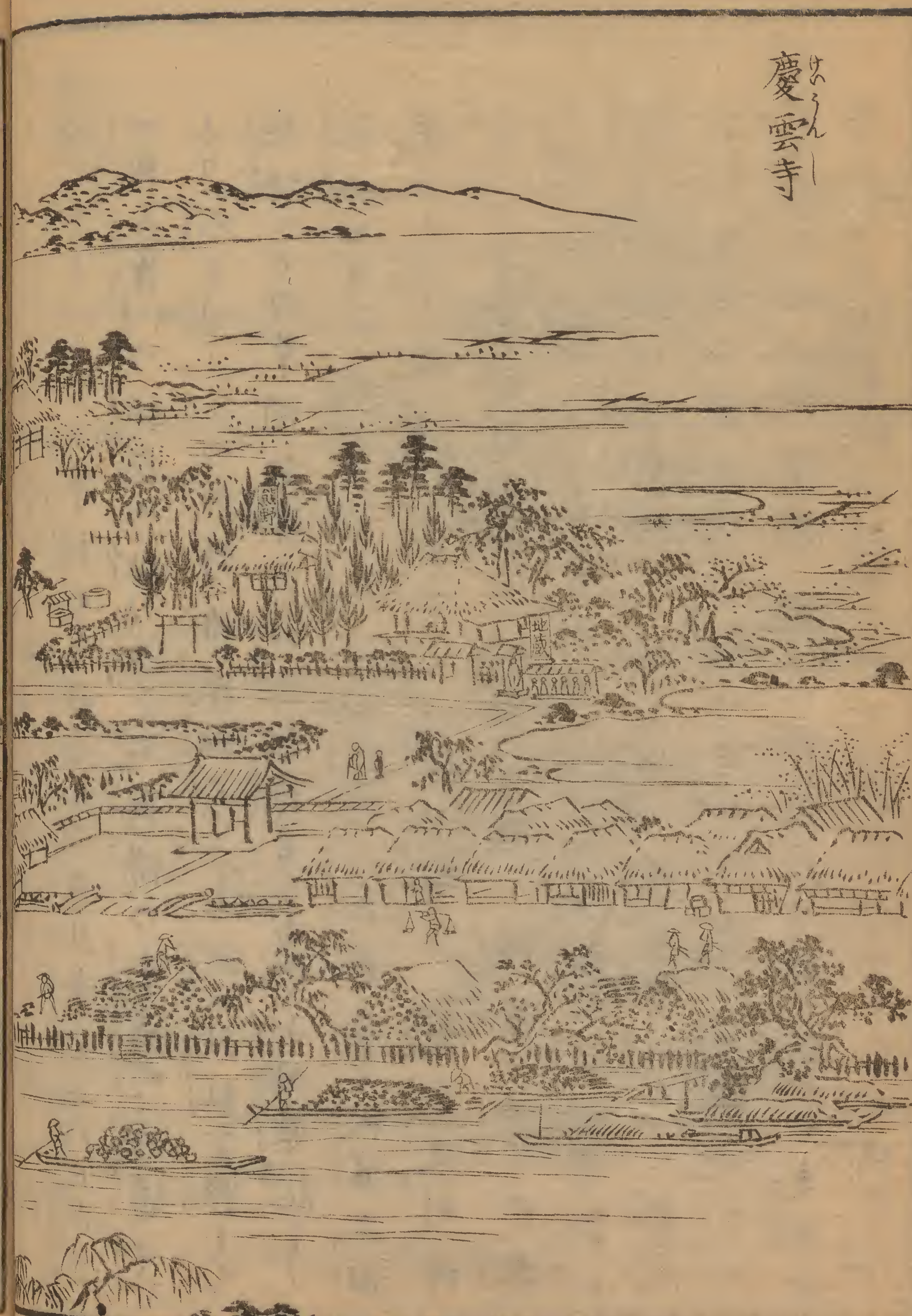
観音山 山頂に観音堂あり故に山の号とせり宗興寺に属せり
今もなほ存して石磴聳立して寺の総門の正中に對せり
本尊正観音の像ハ毘首羯摩天の作にして五寸九分
ありし昔焼亡によりてその旧記を失ひぬ今其来由を志る
をといふ

洲崎明神（すさきみやうじん）
本社
神明

熊野権現山　観音堂の山續にて堂の左の方少し高き
地に形ばかりなる草祠あり是往古小田原北条家の功臣間宮
四郎左衛門の城塁の址なりと云前條の本宿町海道筋
より右に付る所の熊野権現社とのみ或ハ此社を移して
其跡へこの草祠を置て旧地を存せらるにや小田原記ニ
永正七年の秋七月上杉治部少輔入道建芳ハ被官上田
蔵人と云し者謀叛を企て北條早雲に一味し武州神
奈川なる熊野権現山を城廓に構へ楯篭る依て治部
少輔自大將として管領より加勢成田下総守渋江
孫次郎藤田虎壽丸大石源左衛門長尾孫太郎ハ名代
矢野安藝入道長尾但馬守ハ名代成田中務丞其外
武蔵の南一揆をかり催し同月十一日権現山に走向ひ
同十九日迄責戦ひ終に城を落せしとあるは此地の事

観音山

けいうんじ
慶雲寺
庫裡
玄関
地蔵

なつけり 小田原記に此山ハ四方嶮岨にして岸高く峙ち南ハ海北ハ深田なり西ニハ山續きけるを削りて堀切て山に續ける平覚寺の地蔵堂を根城に取立と云々

吉祥山慶運寺茅草院と号滝の橋の北詰より西の方へ一町半ばかりも入りて飯田道の右側にあり浄土宗花洛知恩院に属す本尊阿弥陀如来ハ立像三尺計あり 作者不知 開山ハ音誉聖観上人にして文安四年丁卯開基といふ 浄土傳燈系図に定蓮社音誉聖観上人ハ氏族未詳或ハ云江州甲賀源氏と初橋場の法源寺弟二世となり又當寺を開創あり宝徳元年増上寺弟三世となりて文明年間一日火車を示現して空中に来去す辞世の頌及ひ和哥あり世に傳ふて観音の應化なりといへり又音誉上人火車に乗せられしハ新著聞集にもつまびらかなり

中興開山ハ願故上人と号

東國紀行

おもて行く神奈川にとゝまり此所ハ小机の城主長老旅宿慶雲ちかきにかまへつかり 今日の宴をたてゆき などあれハ

まかりて夜ふけても見しれ河原の桃咲かゝるの春の夜ハ と桃源の古言をおもひ出るもうれしけり 下畧

宗牧

按るに此宗牧の紀行に慶雲は作る後雲を運に改るなりん又宗牧乃當寺に宿りなりしハ天文十四年三月三日なり

臥龍山雲松院乾徳寺と号滝の橋際より一里十四五町西の方小机村長津田街道の左側にあり曹洞派の禅林にして遠州の石雲院に属せり本尊虚空蔵菩薩ハ木佛にして座像八寸計あり當寺ハ小机の城代笠原越前守信為開創の寺院にして 當寺靈牌に乾徳院殿雲松道慶庵主 明應四年乙卯六月八日と注せり 開山ハ季雲永岳大和尚と号 大永六年丙戌二月十五日化寂すと 總門の額臥龍山の三大字ハ僧月舟の筆なりと

小田原記に弘治三年丁巳七月二十六日武州小机の城代笠原越前守小田原におゐて逝去す法名雲昌慶公庵主と号す武勇技藝ともに無双の達人にして古早雲寺殿の忠臣より長綱に付氏康へ忠功かぞへかたし其子ハ能登守なりとあり此書に雲昌慶公とあるハ雲松道慶ならんかなり又同書に永禄十年信玄小田原へ発向せしとある条下に小机にハ長綱の代に笠原能登守在城せしとあれハ父子共に二代の間小机の城代たりしなるへしされとも明應四年ハ弘治三年に先たつ事凡六十三年なれハ越前守没卒の年代違へり猶他日訂正すへきもの也

鐘堂前左の方にあり銘ハ明心越禅師撰せる所なり其文左のことし

夫法界聖凡三途六道皆由人一念之所成擧世而

こづくゑのしろあと
小机城址
うんしようゐん
雲松院
相生松
住吉原
白山
雲松院
本堂

言之則有陰陽晝夜之分在人而言之有迷語聖凡
之別蓋以我佛垂慈救齊六合無分天上人間惟以
利生爲事然而種々隨機導利有情同圓覺性故又
設鐘聲佛沸拔濟淪稱其功德曷勝言哉茲有

武州都築郡小机庄根古屋郷臥竜山雲松院住持
別峰者曹洞之末孫大源派下遠州高尾石雲院之
門葉也於是歳壬成暮春積衆縁開鑄銅斯鐘以就
并新建立樓門而施鐘於其梁因質余銘而記之

銘曰

舉世皆暗　幽處聞鐘　聞而返聞　恩遍六道

惟鐘是明　幽處皆明　行願速成　利極四生

聲傳法界　明通幽處　不聞而聞　無盡含識

響徹幽冥　幽處無形　菩提自生　俱登化城

東皐心越杜多稿

于旹天和龍集玄戳閹茂季春如意珠日

臥竜山雲松禪院現住宗蘸代置之

武蔵國豊島郡江戸住

根本之家御鑄物師

長谷川刑部國永作

小机城跡　同じ通道五丁計を隔て道より右の方城坂と云を二町斗登りてあるを土人ハ城山と号せり今官林となれり小田原記に大永四年甲申正月十三日北条氏綱上杉朝興を攻落し帰陣の後小机の城を普請ありと記せり依て老臣笠原越前守同能登守父子を城代として此所に居住せしむとなり封境今南北一町余東西四町計の小阜にして四方に湟の形を存せり　高六七丈あまり　中心の平地纔に百歩ばかりもありて今畠となれり　古ハ橘樹郡都筑郡にまたがりて小机の属郷百八郷ありしとなり　又笠原家の臣沼上出羽といへる人の子孫今此地に存せり其家に刀剣の類を収むると云　按に北条家分限帳に沼上といへる人小机の内井田の地を領せしよし註せり此出羽某なるべしと云なるべし又同帳に笠原藤左衛門といへる人小机八朔を領し笠原佐渡といへるも左衛門佐知行の内小机網島箕輪を領すもとあるは笠原弥十郎を高田玄番助も小机篠生の内を領し笠原平左衛門といへるも領の内にも小机師岡の地名を注しかへすも按に此の越前守の氏族なりしなるべし

白山権現　城山の東の山背にあり古の鎮守なりしと云傳ふ

松亀山泉谷寺 本覚院と号す城山よりも五六町を隔て長津田通道の左にありて大門三丁計り間左右に櫻の列樹あり
此地の小名を泉か谷と云故に寺の号とせりと
浄土宗にして花洛智恩院に属せり本尊ハ一光三尊の阿弥陀如来本像にして二尺八寸計なりも作者ハしらす當寺ハ鈴木但馬守といへる人の開創あり
此人未考
開山を名蓮社見誉大道善悦大和尚と号を
弘治元年八月二日化寂を下總飯沼弘経寺の六世なり
中門の前に天正十八年小田原北条家より建る所の天正十八年比制札あり

淡島明神社 相模街道大熊村より左へ十三四町入て折本村にあり神主雲路氏奉祀す祭禮ハ二月三日縁日ハ毎月三日十三日にして祭神ハ少彦名命及ひ神功皇后二座なり勧請の初ハ詳ならすと云

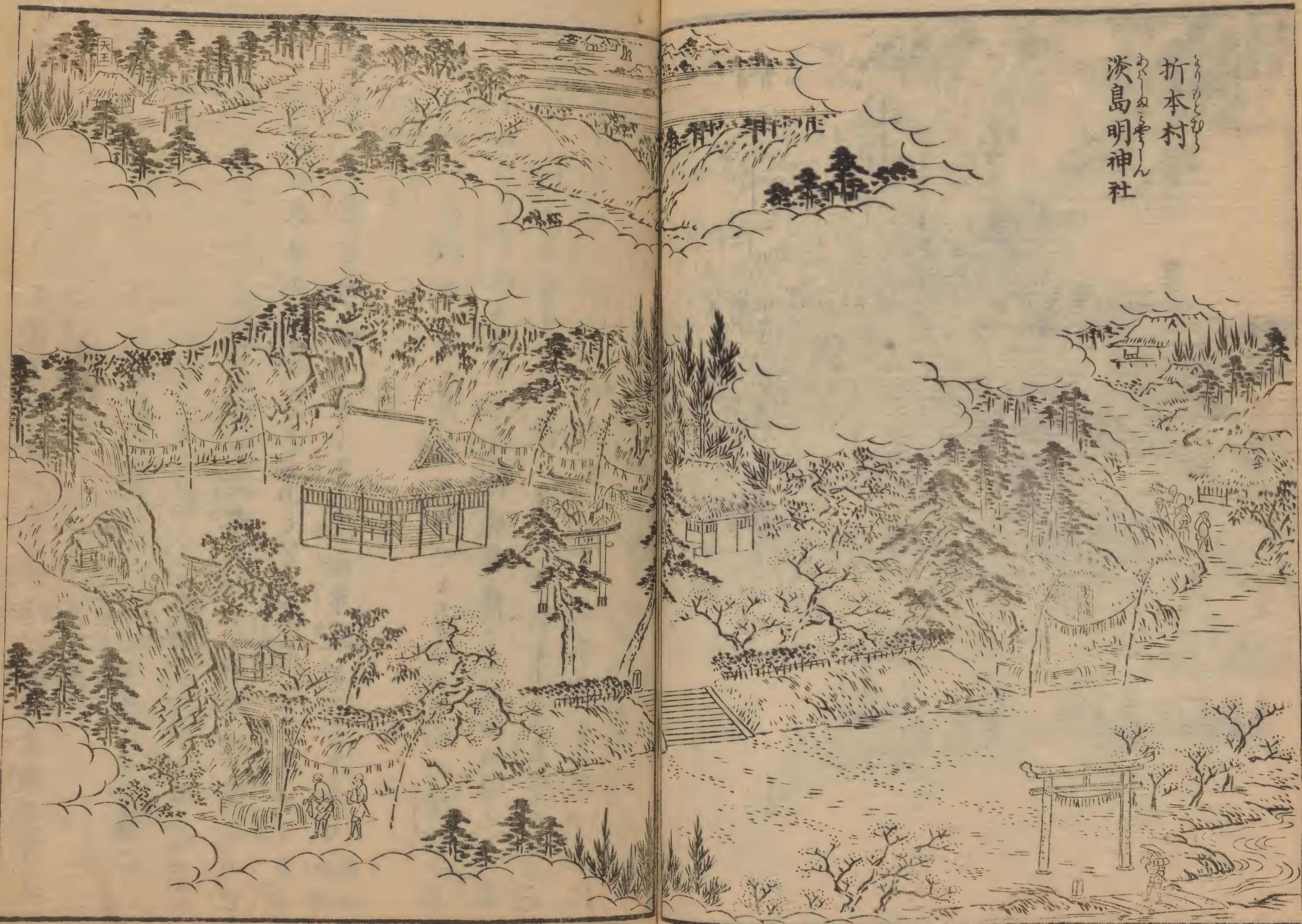
櫻樹 神前東の方にあり昔土人此山に入て櫻の老樹を薪にせんとして是を伐んとせしに大なる蛇ありて其樹を衛りしかバ惜むに似たりと里人おそれてそれより社に迎へまつりし樹なれハ當社の神の愛樹なりとて恐怖し終に其樹に斧を付るものなく宝永正徳の頃まで猶朽残りてありしとなり今其根株より生じたる蘖の若木社の上にありしを今神前の西に移したりとぞ
あり社の東に栽しハ宝永の頃其根をおちしよしなりといふ

淡島神祠之碑
寛保壬戌夏折本の邑長藤原英至といへる人邑民と共に謀て當社を新にせんと欲すその頃此地ハ松下某公の采邑なりしハ英至此事を告て某公に請ひ祠に近き地数百歩を此神祠に属す英至退て文を麻布善福寺の了誉上人に請ひ書を烏石山人に求む篆額ハ本多康桓竜の画ハ古山平國豊の筆なり其文ハこゝに省きてのせず

多目周防守宅地 青木町の中にありとおほしけれど其地定かならず小田原記信玄小田原を襲ふ事ある条下に多目周防守その頃青木といふ所に居住しけりとあり
牧の城にありて上州の國峯岩倉のおさへとされ落去の時討死せしよし
東古戦録に此人信州上州の境西
程ケ谷蒔田城の条下に詳なり
小田原北条家の所領役帳に多米新左衛門青木を領する由見えたり
按ずるに小田原記に多目周防守を吉良左兵衛佐義門の家臣なりとしるされど
北条家の所領役帳によれバ数ケ所ハ北条の臣なるべし
北条氏康の妹聟なりしハ新左衛門を後周防守として小田原より吉良家へ附
人なりしにやあるべし吉良家に属してありしなるべし

泉谷寺（せんこくじ）
本堂
観音
地蔵
玄関
庫裡
住吉原

師岡（もろをか）
熊野権現宮（くまのごんげんぐう）
本社
別當
山王
地蔵
弁天

折本村
淡島明神社
天王
本社

青木山西向寺　同所青木町の横小路の右側にあり虚無僧寺にして普化宗門金洗派と称せり扣番所と号る物ハ（して本寺の御用をあつかふ）

本覚寺切通　同所本覚寺の北の方の間を切開きて道路とせり（長津田通道及三澤村等への路なり）永正七年の秋上杉治部少輔入道建芳ヶ被官上田蔵人建芳に背き此地に打て出熊野権現山を城郭に取立西に續きたる山々をハ其間をハ堀切本覚寺の地蔵堂を根城とせしよし小田原記にみえたり（熊野の権現山の条下とあはせ見るべし）

青木山本覚禅寺　同所の南七軒町にあり曹洞の禅刹にして小机の雲松院に属せり本尊地蔵菩薩ハ一尺四五寸の立像なり相傳ふ當寺ハ嘉禄二年の開創にして其後天文紀元の年曹洞大源の末流季雲四傳の法孫陽廣禅師此に住初て法幢を建て禅風を起せり（元禄の初殿堂門廡悉く祝融氏の為に燬を）佛殿の額に本覚禅寺と書せしハ圓明寺の開祖道山和尚の筆なりと

圓明山陽光院　本覚寺の南に隣る遠州可睡齋退院の地にして曹洞の禅院なり開山敕特賜本然圓明禅師と号（石牛天梁和尚と号）後の山を福聚峰と号し門の額に福聚望と書永平圓明禅師の筆なりと

道灌山　同所西の方北山中の字なり昔大田道灌入道此地に城を構へたりしよりの号なりと云

飯綱権現社　神奈川臺町海道の右の山上にあり本覚寺より一町斗南にあり別當ハ真言宗同所の萬年山普門寺奉祀せり祭礼ハ五月十七日なり飯綱権現本地佛にて不動明王行基大士の作なりと座像一尺七八寸并脇ハ大山祇命といふよ相傳ふ右大将頼朝卿此尊像を深く崇敬なしたまひ治承四年

八月伊豆國石橋山敗軍の後安房國へ渡海の時本尊の
霊示によりて風浪の難を逃れ給ひ其後竟に天下一統なし
給ひしかハ文治年間此地に宮社造営ありて神領等を寄
らせ給ひしとなり又遂の後大田道灌此地にゆきて尤も信厚
かりしと云

袖の浦　此地の光景長汀曲浦されバ袖の形に似たるゆゑに名
とす烏丸大納言光廣卿關東下向の頃帰路に再此地に
よぎり給ひて和歌を詠せらる

こととひ袖の浦に泊まりく
思ひきや袖の浦浪立かへりここに旅寝を重ぬべしとハ　光廣

其時みづから筆を染給ふ詠草ハ此地
江戸屋何某が家に秘し置り

按に黄葉集に初五文字をあまちのとあるハ結句のたがひをとやとす黄
葉集にをあやまりて侍写のけぬかりなるべし

富士浅間祠　同所の南芝生村海道の右の方山の中服にあり

保土ヶ谷天徳寺といへる真言寺の持なり此地に一の
暗窟ありて上俗是を冨士の人穴と号く相傳ふ昔頼朝卿
冨士の裾野に御獵ありし頃仁田四郎忠常に命せられし
冨士の人穴の奥を究めしむ忠常終に此穴中に入りて拔
出たりとの誕譚よりところなしといへども古くより云傳る
故に是を闕ことなし

洲乾辨財天祠　芝新田横濱村にあり故に土人横濱辨天
とも稱せり別當ハ真言宗にして同所増徳院奉祀を祭
礼ハ十一月十六日なり安置する所の辨財天の像ハ弘法大師の
作にして江の嶋と同木之此地ハ洲崎にして左右共に海に臨ミ
海岸の松風ハ波濤に響をうつし尤佳景の地なり
海中姥島など称する奇巖ありて眺望すぐれて
秀美なり